第66回　中国文化賞

受賞者の業績と横顔

ひろしまだいがくハイシムけんきゅうセンター
05年、広島大とSTARCが開発したモデルが世界標準の最終候補に残り、大学が設立
▽08年、高耐圧モデルが世界標準に▽09年、同モデルを公開▽広島大の6教員で構成。事務局は同大学術室学術推進グループ内

世界標準の回路設計用モデル開発

広島大学HiSIM（ハイシム）研究センター

＝東広島市

産学の英知集め快挙

携帯電話や液晶テレビの中枢を担う集積回路。何億ものトランジスタを組み込む回路設計の際に性能を評価する計算式「トランジスタモデル」を開発し2008年、日本初の世界標準に認定された。

モデルは、電圧に対する回路の応答を解析するソフトの心臓部。電子製品の開発の根幹だ。三浦道子センター長（60）は「最高のモデルを生む世界の拠点」との自負心を抱く。

発足は05年。最終候補に残った欧米連合との一騎打ちを支援するため広島大が設けた。「日本の半導体産業の活路を見いだす」と11社でつくる半導体理工学研究センター（STARC）の技術者も加勢。惜敗したが、産学の英知を集めたモデルが快挙の礎となった。

原点は広島大が1998年から始めたSTARCとの共同開発。トランジスタの高度化に、米カリフォルニア大の世界標準モデルは対応できなくなっていた。産学チームは電子の物理的性質を忠実に反映し、評価の精度とスピードを高めた。

新領域も切り開く。電気自動車などの回路の設計に使うタイプだ。三宅正尭特任准教授（27）は「製品の省エネも進め温暖化対策に貢献する」。人工臓器用の回路など生体分野にも目を向ける。

海外大学とも協力し08年、北京大など4校と10年先を見据えた次世代モデルも開発。多彩な技術ニーズに応え、世界の先頭を走る。（境信重）

上田　宗冏氏　＊　大植　英次氏　＊　二宮　義人氏　＊　松本　卓臣氏　＊　西尾　尚道氏　＊　福田　百合子氏　＊　纐纈　厚氏

TOPへ